

知念直美、チョマ・オルショヤ、Dr. ゴルダーン夫人オラー・マールタ、  
ヘグドゥーシュ夫人トート・ジュジャンナ、伊藤直美、Dr. セーカーチ・アンナ  
子ども・音楽・芸術 ～ハンガリーと日本～

フォライ・カタリン、セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア、羽仁協子の繋がりの中で

編集責任者：Dr. セーカーチ・アンナ

編集者：チャーニ夫人コーシュ・イルディコー

総括責任者：ヴィカール・カタリン

発行責任者：ナジ・アニタ（東京リスト・ハンガリー文化センター所長）

## 目次

1. 序
2. フォライ・カタリン、セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア、羽仁協子の紹介
3. ハンガリーにおける幼児音楽教育の始まり  
フォライ・カタリンの経歴 ～その始まりと展開～
4. 保育園における造形美術教育の状況、ヴィダ・マーリアの経歴の始まり
5. 日本における 1960 年代中頃までの音楽教育と造形美術教育
6. ハンガリー人の目から見た、日本における造形美術教育の状況
7. 訪日前のフォライ・カタリン ～羽仁との手紙を基に～
8. フォライ・カタリン 1968 年の訪日 ～フォライの日記を基に～
9. フォライ・カタリンを回顧して

## 序

私はセーカーチ・アンナと共に、私たちの母に敬意を表したいと思っていた。母フォライ・カタリンとアンナの母セーカーチ夫人ヴィダ・マーリアとの親密な関係、そして専門分野での業績、さらに二人と強い絆に繋がれた羽仁協子について知りたかった。それがこれほど大きく信じられないほど興味深い研究になるとは予測もしていなかった。

ケチケメートのコダーイ・ゾルターン音楽教育研究所のアーカイブに納められているフォライ・カタリンの遺品を含む資料の中に「日本の箱」というものがあるが、その中から羽仁協子がフォライ・カタリン宛てに書いた 30 通ほどの手紙が出てきた。その手紙からは専門上での二人の関係の深さが詳細に分かる。フォライ・カタリンが講演だけではなく、保育士や音楽教師にコダーイの理念を基にした幼児音楽教育の実践を紹介したのは、1968 年の日本が最初である。羽仁協子の最大の真価はその

重要性を理解したことである。羽仁の卓越したハンガリー語能力のおかげで2人の考えがより接近し、日本への旅の準備が綿密になされた。

セーカーチ一家が1960年に外交官として日本を訪れた時、羽仁協子はすでにセーカーチ一家と知り合っていた。一家は日本文化や芸術そして言語に直に触れ、ヴィダ・マーリアは自身の専門分野の観点から日本の子どもの絵画についての探求を始めた。

この研究は私たちを子ども時代へと呼び戻した。文化あふれる環境の中で育ったこと、私たちの親がそれぞれの専門分野を結び付け、同じ目的をもって活動した様子が見えてきた。

私たちは家族の遺したものや個人的な思い出のような「純粋な源泉」に頼っていたが、最初の頃の活動や日本への旅、どのような経過を経て彼女たちが繋がっていたのかにもう少し詳しく光を当てたいと思った。（ヴィカール・カタリン）

この研究プロジェクトは、フォライ・カタリンの娘であるヴィカール・カタリンが、ヴィダ・マーリアの娘 Dr. セーカーチ・アンナと、ケチケメートのコダーイ研究所図書館館長のチャーニ夫人コーシュ・イルディコーの助力により立ち上げた。ここに、ブダペスト大学（ELTE）初等・幼児教育科の教員でありソルフェージュ教師、合唱指揮者、幼児教育者であるヘゲドゥーシュ夫人トート・ジュジャンナ、幼児教育家で才能推進教育アドバイザーである Dr. ゴルダーン夫人オラー・マールタ（ブルンスヴィク・テレーズ賞受賞）、音楽教育者の知念直美（フォライ・カタリン賞受賞）、音楽教育者であり音楽専門通訳・翻訳家の伊藤直美（Pro Cultura Hungarica 文化勲章受章）、ヴィダ・マーリアの孫で音楽療法士のチョマ・オルショヤが加わった。

東京にあるリスト・ハンガリー文化センター所長ナジ・アニタの援助により、コダーイ・コンセプトの国際的な広がりやハンガリーー日本間の文化交流に関する研究資料が一般公開されることになった。この文化センターの協力により、2021年春に、独自のビジョンを持ったオンライン講座が開かれた。

講座シリーズの中から作成された抄録は、幼児の音楽教育法を練り上げ実践したフォライ・カタリン、幼児美術教育の専門家セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア、日本の教育にコダーイコンセプトを（フォライ・カタリンの援助を得て）移植した羽仁協子、これらの人たちの繋がりを通し、書簡、日記、そしてその他のオリジナルでこれまでに出版されていない資料を基に、1960年代からの日本・ハンガリー文化の相互影響を紹介するものである。

## フォライ・カタリン、セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア、羽仁協子の紹介

### フォライ・カタリン（1926–2004）



フォライ・カタリンは幼児音楽教育においてハンガリーを代表する人物である。コダーイ・ゾルターンの弟子であり、ハンガリー音楽教育の大使として世界中に知られている。ハンガリーラジオの幼児のための番組において、土曜日ごとにその鈴のような声と共に早くから国中に知られる存在であった。チョバーンツ通りの保育園で行われた幼児音楽教室は、すでに 1947 年から音楽教育に関心のある何百人もの専門家が見学を訪れた。国立教育研究所の研究チーフとして、ハンガリーの保育園を訪問し続け、模範実践や講演、講習会などで保育士たちを助けた。また、人格形成のためのもっとも効果的な手段は歌、音楽であると説いた。国立乳児保育法研究所では乳児の音楽発達とその可能性についての研究に参加した。音楽教育法に関する多くの著作や、歌と遊びをまとめた選集がある（『ヨーロッパの子どもの歌』『赤ちゃんがハイハイする、歩く』『歌う動物たち』『てんとう虫』『たんぽぽ』。『保育園での歌』は 1974 年の初版以降 23 版を重ねている。この本は国際的にも評価を受け、何か国で翻案されている。その中でも『*Music in preschool*』は世界中に知られている。フォライ・カタリンのこの業績は、現在でも幼児音楽教育でもっとも使われている教育法の手引きであり子どものための歌の選集でもある。

多岐にわたる国内での教育活動と併行し、数多くの国（日本、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ヨーロッパのほとんどの国）からセミナー、講演、教育実践の依頼があった。音楽教育委員会書記、国際音楽教育学会（ISME）の会長、更には ISME 内に幼児のセクションを設立し議長となり、またハンガリー音楽家連盟の理事、ハンガリーコダーイ協会および国際コダーイ協会（IKS）副会長、ハンガリー音楽評議会会長と、国内外での組織で重要な役割を担った。

2011 年に、イギリス、アメリカ、オーストラリア、カナダ、ハンガリーの同僚や教え子が、フォライ・カタリンの教育業績を記念し、また幼児教育のために努力した人のために、国際フォライ・カタリン賞を創設した。この賞は、高いレベルの音楽教育の実現のために現在も努力する教育者を奨励するためでもある。

セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア（1916–2000）



セーカーチ夫人ヴィダ・マーリアは、幼児期における複合芸術教育先駆者の一人であった。芸術教育と心理学の実験を伴って、芸術教育の意義とそのトランスファー効果を証明した。ヴィダ・マーリアは 1930 年代末、ハンガリーの学校教育の改革者であるカラーチョニ・シャンドル<sup>(1)</sup>のサークルに入り、コダーイの業績を知るようになった。1941 年、ハンガリーの美術大学を絵画教師とグラフィックのディプロマを取得し卒業。並行して、絵本を作成。コダーイ自身からの許可を得て、その民謡蒐集から挿絵を挿入してわらべうた遊びの本を制作する。ナジサロンタでのコダーイの蒐集からは唱え歌の本を制作。1951 年にトビリス（ソ連）で芸術学の学位を取得。保育士養成校、教育大学を経て、ELTE 教育学部で教えた後、同心理学部で教鞭をとった。ヴィダの研究の主となるものは幼児期の芸術教育であった。1960 年前半 5 年を日本で過ごし、日本での幼児期の芸術教育を観察した。また地方の学校を訪問、学術会議に参加したり記事を書いたりした。後に、日本での観察とそこから学んだことを、ハンガリーでの教育活動や研究調査に反映させた。また日本での体験を『日本の子どもの芸術』と題した本にまとめた。帰国後、保育園その後小学校で複合芸術教育を実践しながら研究調査した。

1966 年から保育園の年少クラスを対象に、写生の分野で試験的プログラムを作成し、保育士のための講習会をブダペストや地方で行った。複合芸術教育について、また幼児の精神的成長についての ELTE におけるセミナーは成功を博した。芸術教育のトランスファー効果に関しては、その成果を学術会議で発表し、何か国語かでその記事が発表された。バルコーツィ＝プレー<sup>(2)</sup>の心理学的効果の調査を依頼され、コダーイの音楽教育の効果进行分析し、ケチケメートにおけるヴィダ自身の実験調査<sup>(3)</sup>と結びつけた。

羽仁協子（1929–2015）



羽仁協子は自由な精神をもつ学校である自由学園で育った。バイオリンを奏し、学園のオーケストラを指揮し、指揮者斎藤秀夫のクラスで学んだ。卒業後ウィーンで、その後ライプツィヒで音楽を学び、1958年からハンガリーに住んだ。協子は父である歴史家羽仁五郎を通じ、コダーイ・ゾルターンの知己を得た。音楽学者ヴァルジャシュ・ラヨシュの下で1年間学び、また1967年までELTEで日本語を教えた。ハンガリー語を完璧なほどに身に付け、文学書の翻訳を始めた。現代文学を日本語からハンガリー語、ハンガリー語から日本語へと訳し、このようにして両国の文芸思潮を紹介。また、近代日本の短編を集めてアンソロジーを編纂した。

1960年頃から羽仁は、ハンガリーを訪れる日本の音楽学者や音楽教師を案内し、通訳も引き受けた。1963年に東京で開催されたISMEでは、セーニ・エルジェーベトの通訳をし案内もし、翌年のブダペストでのISMEでもアクティブに参加し通訳した。1967年最終的に帰国し、そこで音楽教育関係の翻訳を依頼された。コダーイの考えに基づく保育園・幼稚園の音楽教育を日本に知らしめ、広めることを決心した。そのためフォライ・カタリンに援助を依頼し、フォライはこれに応じた。

<コダーイ芸術教育研究所>を設立。日本の若い保育士や音楽教師が単独あるいはグループでハンガリーにおいて学ぶことができるよう手配した。ハンガリーの教育法をより知ることができるために、数えきれないほどのハンガリーの音楽教育に関する書物を邦訳した。コダーイの精神を伝える保育園を設立した。伝統的な日本の歌を使い、専門書を邦訳することで、コダーイの考えに基づく日本における幼児音楽教育の礎石を築いた。

### 3人の関係

#### フォライ・カタリンとセーカーチ夫人ヴィダ・マーリア

フォライ・カタリンとヴィダ・マーリアは若くして知り合った。共通の知り合いや共通の専門分野を通し、一生を通じての友情が築かれた。フォライの日記には、ヴィダの講演を聞いた折々に、子どもの人格発達の観点からフォライにとって重要

と思われることのメモが多く記されている。芸術教育の領域では同様の考えをもっていたことから一緒に本を著している。

### セーカーチ夫人ヴィダ・マーリアと羽仁協子

ヴィダ・マーリアが、ELTEで同僚の羽仁協子と知り合ったのは1959年末である。ヴィダが家族と共に何年も日本に行くことになった時、羽仁は様々なアドバイスをし、到着後は羽仁の家族に引き合わせた。羽仁一家と懇意になることにより、進歩的な考えをもつ人々と知り合うことができた。その後、羽仁が帰国し、ヴィダがハンガリーに戻ってから2人の友情は続いた。

### フォライ・カタリンと羽仁協子

羽仁協子は1961年に、ハンガリーの音楽教育について書いたヴィダ・マーリアの記事を邦訳した。その記事は、保育園の音楽教育についてのフォライ・カタリンの役割を強調したものである。羽仁協子は1964年のISMEでフォライ・カタリンの実践を実際に見ているし、1966年にはチョバーンツ通り保育園を訪問している。音楽教育の方法論について邦訳し始めた時、歌をどのように選ぶか、翻案をどのようにするかについてフォライから専門家としてのアドバイスを依頼したことは、二人の手紙のやり取りの中で見ることができる。フォライ・カタリンの遺品の中に、フォライに宛てた羽仁の手紙が数多くある。その中に、羽仁はどのような質問をフォライにしたか、そしてどのような質問にもフォライが答えたことが分かる。フォライのアドバイスに従って行った事がどのような効果をもたらしたかということに何度も言及されている。フォライの方法論や考えに、すべての観点から忠実に従っていることが分かる。

### ハンガリーにおける幼児音楽教育の始まり、フォライ・カタリンの経歴～その始まりと展開～

ハンガリーではすでに1891年に保育園の規定が施行され<sup>(1)</sup>、全国の町や村に託児所を設置しなければならないとある。そして、資格をもちハンガリー語も話すことのできる保育士を雇うよう定めた。学校の準備をする役割をもつこの機関を、国は重要に考えた。1930年頃からドイツの影響が非常に強くなり、均衡を保つために、教育域において民族習慣などのハンガリー文化保護や民族意識を高めるという理念が強調されるようになった。国内外ですでに名声と人望のあった作曲家であり音楽教育家であるコダーイ・ゾルターンは、1940年の『保育園の音楽』と題された講演で「後」に出版される<sup>(2)</sup>「」、保育園の音楽教育に関しての考えを述べた。

『文化を相続することはできない。すべての世代が自分たちのために常に新しく獲得しなければ、祖先の文化はあっという間に蒸発して消え去る。』<sup>(3)</sup>

子どもたちには、人工的で教授的な歌の代わりに、純粋なわき水から出たそれぞれの年齢にふさわしいハンガリー民族のわらべうたを教えることが大切である。

民族国家への努力の道は、第二次世界大戦そしてソ連の政治と文化の台頭により停止した。ソ連の教育の影響は何十年という長期間、ハンガリーの公教育の方向を決定した。1948年に保育園や学校が国有化され、1953年には保育園教育に関する規定が新しく制定された<sup>(4)</sup>。保育園が公教育の1機関として位置づけられ、小学校への準備という機能が強調された。統一されたガイドラインに従って機能する機関において、コダーイ・ゾルターンズのハンガリーの民俗音楽から出発する教育思想と音楽の母語の早期習得を目的とする考えが容認された。このようにして、コダーイの観念に基づくフォライ・カタリンの乳児・幼児に対する音楽教育方法論が確立し定着した。

幼児の音楽教育と関わる仕事をしたいというフォライの希望は、早期に決心したことであった。『私たちはコダーイをこのように見た』という題の本の中で、フォライは次のように振り返っている。

「私は、小さい子どもたちの音楽教育に関する仕事をしたいと思っていましたので、どのように始めたらよいのかというアドバイスを（コダーイから）もらいに行きました。・・・幼児に音楽指導することを責任をもってするのなら、少なくともあと二つディプロマを取得するように、また、保育園で子どもの間に入り、子どもたちとどのように接したらよいかを実体験することというアドバイスをもらいました。」<sup>(5)</sup>

1947年に、師コダーイ・ゾルターンズのアドバイスにより、「音楽保育園」という幼児の音楽教室をブダペストの保育園で始めた。フォライ・カタリンのチョバーンツ通り音楽保育園の情報は国内外の音楽専門家の間にあっという間に広まった。



コダーイ・ゾルターンズのコンセプトに基づく音楽指導を垣間見るためハンガリーを訪れた人々は、例外なくチョバーンツ通りの保育園を訪問した。

## 保育園における造形美術教育の状況、セーカーチ夫人ヴィダ・マーリアの経歴の始まり

戦後、乳幼児保育園や学校の制度は大きく変化し、指導目的も変わった。教育機関は国有化され、画一的なカリキュラムと単一のイデオロギーという背景を形成した。イデオロギーは社会主義労働者党が決定した。戦後、女性は子どもを養育しながら就労したことから、朝6時から夜6時まで開いている乳児保育園（0～3才）や保育園（3～6才）が必要であった。学校では学童保育のシステムが組織された。教育の目標は、ソ連を範例とした社会主義的な人間像の実現であった。保育園の教育において絵を描くこととは真似をすることで、パターンを模写させた。

戦前の著名な教育者の一部は（すでに世間によく知られ権威を持っていたため）指導者としての地位にとどまることができた（例えばコダーイは音楽教育の領域で）。しかし第二次世界大戦前に全国的に知られた教育者で教授であったカラーチョニ・シャーンドルは1948年閑職に追いやられた。カラーチョニ・シャーンドルは民衆文化から出発する芸術教育を信奉しており、コダーイの民族音楽に基づく教育と文学教育を関係づけ、芸術教育の複合を大学の講義でも著作でも強調した。カラーチョニの業績は、1952年の死後、教え子たちの業績を通し広がっている。

その教え子の一人がヴィダ・マーリアである。ヴィダ・マーリアは20歳（1936年）からカラーチョニのブダペストでのセミナーに参加した。そのセミナーでは発達、創作、思春期の社会心理学、文学、映画、劇場についてがテーマであった。カラーチョニの考えは、ヴィダ・マーリアにとって学習と教授のプロセスについての大きな体験であった。カラーチョニは周りに集まる若者に、読むこと考えること議論することだけではなく、課題も与え、真の共同体を築いた。ヴィダはこのサークルでコダーイの業績と知り合った。このことについて次のように記している。

「サークルでは皆、民謡を歌っている。私はコダーイの講演『幼稚園での音楽』とその著作の大ファン。コダーイとバルトークの音楽には大きな影響を受けた。カラーチョニの教え：子どもには民族文化とクラシックを！言語の場合も、音楽の場合も。この考えを基に、私はコダーイの同意を得て、『バラの木のつぼみ』と『なでなで』という音楽入りわらべうた遊びの絵本を作った。その後、コダーイがナジサロンタで蒐集した唱え歌から選び、『青豆コロコロ』という題で絵本を描いた。」<sup>(1)</sup>



ヴィダ・マリアは美術大学では画家セーニ・イシュトヴァーンの生徒であった。そしてヴァルガ・N・ラヨシュの下でグラフィック、木版画や銅版画を学んだ。大学入学前に、グラフィック・デザイナー、イラストレーターとして絵本が出版されている。1941年に絵画教師のディプロマ取得。1945年保育士養成校で教え始め、1946年からソ連で学ぶ。グルジアで幼児芸術教育を学び、これをテーマとして博士論文を書いた<sup>(2)</sup>。

## 日本における1960年代中頃までの音楽教育と造形美術教育

### 音楽教育の状況

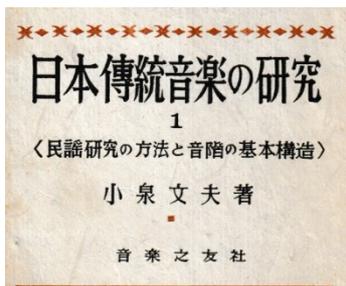
コダーイ・ゾルターンを民俗音楽学者として日本に最初に紹介したのは、音楽学者であり音楽評論家の園部三郎だと考えられる。園部は1956年に8か月をかけて東ヨーロッパを訪問し、ハンガリーも訪れている。その際、コダーイとハンガリー科学アカデミーで会見した。このことについては、その著『東ヨーロッパ紀行』に記している<sup>(1)</sup>。「あなたとバルトークのハンガリー民族音楽の研究業績を最初に日本に紹介した一人であるかもしれませんが。」と自己紹介し、「もうそれは20年も前のことだ」と続けている。つまり、既に1930年代にコダーイ・ゾルターンとバルトーク・ベーラの民謡研究について、園部は日本に紹介したということである。この著作で、ハンガリーの音楽学校を訪問したと園部は記しているが、音楽教育については何も述べられていない。園部は新しい教育方法については柔軟な姿勢をもち、音楽教育を自国の民謡から始めるというコダーイの考えを好ましく思っていた。

園部三郎は1955年から10年間、日教組教研集会の講師を務めた。1956年の教研集会でのテーマのひとつにわらべうたが上がっているが、教育理論の一方法としてしか扱われていない。同年、日本音楽創育の会が発足し、音楽教育にわらべうたが初めて提起される。

翌1957年に園部は「音楽教育の会」を発足させ、この会と日教組教研集会において、わらべうたによる教育の必要性を説いた。即ち、理論上でわらべうたを扱うことから始まり、実践的応用の方向に進んだということである。

1960年に民族音楽学者小泉文夫によって、日本民謡の音階構造を明らかにした『日本伝統音楽の研究』が出版された<sup>(2)</sup>。この著作により、教育者たちは自国の民謡とわらべ歌から始める音楽教育への関心を一層寄せるようになった。

1961年、小泉文夫を中心とした東京芸大民俗音楽ゼミナールが東京のわらべうたの調査・研究を始めた。この成果は、1969年に『わらべうたの研究』という題で、研究編と楽譜編に分けて出版された<sup>(3)</sup>。東京で小学生により実際に歌い遊ばれているわらべうたを蒐集することにより、わらべうたが子どもにとって過去のものではなく、現に子どもたちの間で遊ばれ生きている生の音楽であることを証明し、そこから音楽教育は出発するべきであると提唱した。



1960年末に日本に到着したヴィダ・マーリアは、羽仁一家との交流を通し、音楽評論家の園部三郎と知り合った。芸術教育を専門とするヴィダ・マーリアは、園部の仕事を援助するの必要を感じた。

## ハンガリー人の目から見た、日本における造形美術教育の状況

1960年、ヴィダ・マーリアは母親として、そして外交官の妻として日本に赴いたが、日本の絵画教育や美術教育を詳しく知ろうと試みた。その仕事の大きな手助けになったのは小林裕子で、1年間でハンガリー語をよく理解するようになったことから、素材の解釈や翻訳の協力者となった。

まずヴィダ・マーリアは自分の子どもが通う<sup>こうがい</sup> 小学校の図工の授業の流れとその記録を絵をまじえて作成し、図工の授業の特徴を観察した。

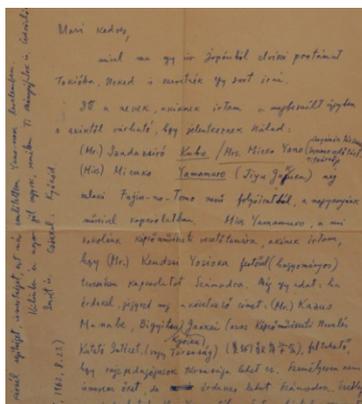
ハンガリーの図画の授業は45分で、生徒は個人個人で描く。日本の授業では何時間にも渡り、時には共同作業でされたし木版画もあった。この授業の名前も両国で異なり、ハンガリーでは図画、日本は図工である。ヴィダ・マーリアは、環境認識と自然科学の教え方において、多くの実験や観察を絵画で認知することに価値を見出した。



### ヴィダ・マーリアによる筈小学校の図工の授業

後に、専門的に詳しい人たちの助けを得ることとなった。ある部分は友人で児童書作家の鈴木三枝子が、他の部分は羽仁協子が自身の交友関係を動員した。画家で自由学園で教鞭をとっていた吉岡堅二をヴィダと出会わせた。羽仁協子は1962年8月23日付の手紙で、美術教育学会と連絡を取るよう、連絡先の名前も付記してアドバイスした。

このようにして『版画』という雑誌と出会い、購読するようになった。また、芸術教育の専門書を研究し始めた。日本各地の図工の教師に頼んで、子供たちの木版画や紙版画を送ってもらい、整理した。中にはハンガリーの大学に送ったものもあった。



ヴィダ・マーリアに宛てた羽仁のハンガリー語の手紙  
(1962年)

ヴィダ・マーリアは、雑誌「版画」に関連し次のように書いている。

「ある号で、楽譜や詩が版画と共にあるのを見つけた。そう、私がずっと前から興味のあることはこれだ。さまざまな表現形態が一緒になっている。学校で、音楽、詩、絵。これは偶然だろうか。それとも意識的な教育結果なのか。」<sup>(1)</sup>

この疑問を解決するために、様々な学校と直接交流し、学校訪問を通して経験を積み上げた。1963年には専門用語も少しずつ分かるようになり、知り合いも多くなっていった。そういう中、美術教育の改革に取り組み、著作もある井出則雄と鈴木五郎と話し合った。井出則雄は彫刻家で、教員養成大学で児童画の発達心理学を教えていた。井出は、「新しい絵の会」の第4回全国学会に参加し講演するようヴィダを招いた。

### 訪日前のフォライ・カタリン ～羽仁協子との手紙を基に～

羽仁協子はハンガリーへ行く前すでに、コダーイ・ゾルターンについて聞いていた。そして、そのコダーイの勧めで、ハンガリー科学アカデミーの民族音楽研究所に1年間属し、ハンガリーの民俗音楽の素材やハンガリーの子どもの歌であるペンタトニックの世界を知るようになった<sup>(1)</sup>。また、ハンガリー語で最初に読んだ本はコダーイの『保育園の音楽』であると、後のハンガリーにおける講演で述べている。

1年後、羽仁協子はELTE大学で日本語教師として教え始め、9年間滞在した。その間も、音楽の世界との関係は切れなかった。コダーイ・ゾルターンの考えを広げるための後押しを、日本でもハンガリーでも行った。日本で掲載されるヴィダ・マリアの音楽教育についての記事を邦訳し、ハンガリーを訪れる音楽関係者や、1964年ハンガリーでのISMEの会議に参加した日本人たちに通訳した。そして、帰国後の1967年、コダーイの考えに基づく音楽教育の意義に気が付いた。フォライ・カタリンに宛てた手紙の中で、次のように書いている。

「何か運命的なものを感じます。私が、コダーイの考えや方法と真剣に関わりだした時、彼はもういませんでした。なぜこのようになったのか、私には分かりません。9年もハンガリーにいたのに。(…)日本の子どもたちのために、とてもとても多くの手助けをしてくれたはずだと思うのです。」<sup>(2)</sup>

羽仁はハンガリーの方法論の本を翻訳し、翻案を始めた。また日本のわらべうたを選びだす作業をし、ハンガリーを模範とした保育園の音楽教育をハンガリーをサンプルとして設立した園に導入した。ハンガリーの知り合い、友人と集中的な文通をハンガリー語でした。幼児音楽教育の領域において主となるアドバイザーはフォライ・カタリンであった。

フォライの遺品の中に、羽仁からの手紙が多く残っている。残念ながら、その返事となる手紙は存在しない。しかし羽仁からの手紙で、フォライが羽仁の質問に対し常に答えたことは明確に読み取ることができる。フォライの提案を実践しどのような結論に至ったか、あるいは3つの年齢層のために作成中のわらべうた集をどのように形作ったかについて、何度も書いている。方法論の翻案では、フォライから受けた知識をそのまま日本で有効に使うことができなと感じ、フォライを日本

に呼ぶことを考えついた。フォライのチョバーンツ通り幼児音楽教室を見学したことのある日本の仲間たちも、この考えにインスピレーションを得た。

May 23, 1967  
Dear Mrs. Forrai Katalin,  
As you may recall, around 20 days have passed since we returned to Japan, after having made a study of the musical education in Hungary. We want to express our hearty thanks for your friendly co-operation during our stay there.  
Here in Japan, both the children and their parents have been paying much attention to our activities. In response to their expectation, we think it our duty to create means and contents, based upon the fruit gathered in from the Hungarian trip. No doubt your musical education, based upon your folk music, will be helpful. We'll be grateful if you would help us with our further activities, exchanging the results of our future study.

Madam FORRAI KATALIN  
I had a deep impression to talk with you and see your music lesson at Ovada even in a short time. As soon as I returned, I printed news about your music education and a photo. I think, to give music lesson to 3 ages children is still rare in the world.

フォライ・カタリンへの手紙 左:中川弘一郎 1967年夏、右:羽仁協子 1967年9月29日付け (LFZE コダーイ研究所アルヒーフ)

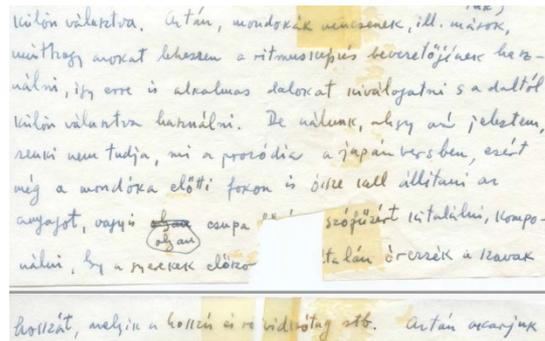
1967. 9. 20.  
Danke Schön!!  
近藤 新雄 Hiroko Kondo  
小島三三  
Koyama Shisyo  
Kantoichi Music College  
Tokyo JAPAN  
堀内 禮子  
Horie Aiuko  
三好 敏士  
Miyoshi Keiji  
(Kagawa)  
新島 雅夫  
Shimizu Masao  
Tokyo, JAPAN  
井上 正二  
Inoue Masaharu  
NAGOE  
新島 雅夫  
Shimizu Masao  
Miyoshi Keiji

az időpont nyár elején legyen, vagy pedig végen, ~~győződéssel~~ ide  
minimálisan 3 hét, mert Tomibán mehetnek legközelebb  
3 egyetemen isportot művelésio helyesen tanítatni seled, s  
rövidebb idővel semmi eredmény nem lenne látható.

左: 日本グループの訪問に際してのお礼の手紙 (本間雅夫) 1967年5月23日  
右: LFZE コダーイ研究所アルヒーフ 羽仁協子の手紙

フォライ・カタリンの日本での1か月の滞在は、羽仁協子にとって特に重要なできごとであった。羽仁はフォライの方法論を、すべての観点から忠実に追った。フォライの訪日の前、羽仁は『Ének-zene az óvodában』(保育園での歌、日本語版題名『ハンガリー 子どもの遊びと音楽』)と題された本の翻案にのめり込んだ。ハンガリーの歌をそのまま使用するのではなく、日本文化の中にあるわらべうたへの差し替えを、フォライのアドバイスに沿って原著の概念に合わせて行った。また、年少・年中クラスのための日本のわらべうた集も、フォライ・カタリンの助けを借りて編集した。このことについて、次のように手紙を書いている。

「他の年齢のクラスも、まだ年少用の歌でしか教えていません。自分のためにはもう、年長クラスの分もまとめてありますが、結果として同じ構成音の歌が少なすぎます。ですから、ある段階から次へ、あまりにも早く進んでしまいます。手持ちの歌を使い尽くしました。自分たちで歌を蒐集しなければなりません。専門家が集めた歌の中からは、使用できるものが非常に少ないのです。」<sup>(3)</sup>



1967～68 年の手紙の一部は方法論への質問で、その他はフォライ・カタリンの訪日のため手続きと、フォライの指導を受けるための日本の保育園の準備についてである。

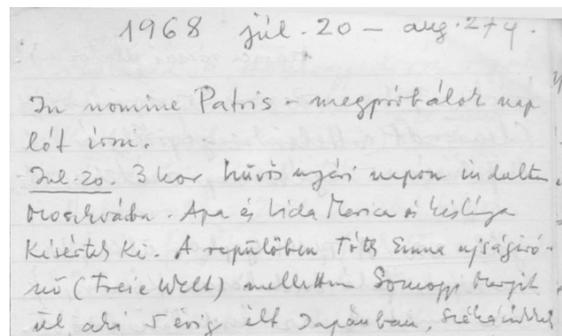
### フォライ・カタリン 1968 年の訪日 ～フォライの日記を基に～

フォライ・カタリンは羽仁の招待を受け、1968 年に初めて日本を訪れ 1 か月滞在した。その後、1974 年、1989 年、1992 年に、それぞれ長期の訪日をしている。そのたびに、その日の重要な事柄を日記に記している。そこからは、非常に忙しい教授プログラムの合間を縫って、風習、人間関係、旅についてなどを読み取ることができる。さらに、理論と実践を共生させ、それをどのように相手に伝えるかという模範ともなっている。

「音楽と共に品位をもって生きることを学ぶのなら、人類はより幸せになると信じる。そして、その方向に向かって少しでも何かをする人は、それだけでも生きた価値がある。」<sup>(1)</sup>

#### ***In nomine Patris – Megpróbálok naplót írni***

(父の御名により一日記をつけようと試みます)<sup>(2)</sup>



フォライ・カタリンは1968年7月20日にブダペストからモスクワへ出発。「父とヴィダ・マリカとその娘が見送ってくれた」<sup>(3)</sup> 東京へはソ連経由で、汽車・飛行機・船と乗り継ぎ6日間を要した。

**JAPAN SOVIET TRAVEL SERVICE Co., Ltd.**  
 Tel: 494-1751-3 Park Avenue Bldg., 20, 1-Chome, Sendagaya, Shibuya-ku, Tokyo. Cable Address: NISSOYOKOSHA  
 10th April, 1988

ITINERARY FOR Mrs. Lezsló Vikar, PAGE \_\_\_\_\_

DATE	TIME	PLACE	REMARKS
July 20 (Sat)	15:05 Dep	Budapest	by Airplane (HA-396)
	20:10 Arr	Moscow	Hotel (2)
22 (Mon)	20:20 Dep	Moscow	by Airplane (SU-25)
23 (Tue)	11:35 Arr	Khabarovsk	
	17:25 Dep	Khabarovsk	by Train (No.4)
24 (Wed)	09:10 Arr	Nakhodka	
	12:00 Dep	Nakhodka	by Ship
26 (Fri)	16:00 Arr	Yokohama	

**MALÉV**  
 MÁVTRA LEHÉNYELÉSESI VÉLLAJÁT  
 HUNGARIAN AIRLINES

POSTALYELÉSEN-BEVEZÉS  
 EXCESS BAGGAGE TICKET  
 Regisztrációszám: 2 1826 047054  
 Flight Coupon No.

1. HANGÁR...  
 2. HANGÁR...  
 3. HANGÁR...  
 4. HANGÁR...  
 5. HANGÁR...  
 6. HANGÁR...  
 7. HANGÁR...  
 8. HANGÁR...  
 9. HANGÁR...  
 10. HANGÁR...

СССР *2-ма Букар*  
 „ИНТУРИСТ“ *410*

ТАЛОНЫ НА КОМПЛЕКСНОЕ ОБСЛУЖИВАНИЕ  
 GUTSCHEINE FÜR PAUSCHALDIENSTLEISTUNGEN  
 VOUCHERS OF ALL-INCLUSIVE SERVICE  
 COUPONS DU SERVICE À FORFAIT

К Л А С С  
 C L A S S E

СССР USSR  
 Дальневосточное морское пароходство  
 FAR-EASTERN STEAMSHIP COMPANY

КЛАСС CLASS *2* 8.30 ВРЕМЯ ЗАВТРАКА BREAKFAST  
 КАЮТА CABIN *207* 12.30 ВРЕМЯ ЛЕНЧА LUNCH  
 МЕСТО BERTH *1* 16.30 ВРЕМЯ ЧАЯ TEA  
 СТОЛ TABLE *3* 19.00 ВРЕМЯ ОБЕДА DINNER

7.22. indul Pestrol a repori. 16.05 kor.  
 24. " Nakhodka-ba a kyo.  
 26. erreis Yokohama-ba 16.00 kor.

klub szilveszter 29. de. ovoda (ny rem munka) (du. Hozsaindoba ind.)  
 + 30. veszel H-ba indal.) (du. kis kirakodas v. varos elso)  
 korcsolti 31. eloadas szilveszter 3 ora hozzan, vagy 700 cene-  
 (Nakhodka) 1. eloadas tanitok elot.

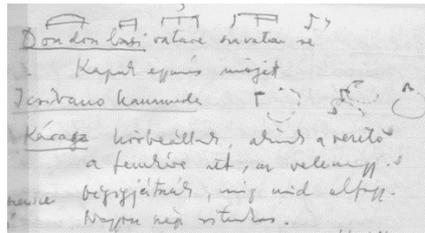
旅程と日本でのプログラム案 (フォライ宛ての羽仁の手紙より)

7月26日横浜到着。港に羽仁協子と教え子や仲間、ハンガリー大使館と日本・ハンガリー友好協会の代表者たちが出迎え。

羽仁協子は、フォライ・カタリンの1か月に渡るプログラムを詳細に計画した。関係者との会合や講演、保育園訪問、実践の準備、快適な宿泊、観光、休憩なども綿密に計画を立てた。

フォライ・カタリンは日記に、課業に子どもが何人参加するか、何歳か、課業は誰が担当するか、課業の流れ絵、どんな日本のわらべうた・唱えが扱われていたかを、必ず記した。

日記によると、23園の音楽課業(羽仁協子が指導した保育士による)を見たということで、その内4園は東京以外であった。藤田恵一指導の小学1年生の授業は9回にわたって見学した。これ以外に、フォライ・カタリン自身も日本の子どもを実際に指導した。主となったのは井之頭保育園で、木下やすこ、そして羽仁が指導していた。課業実践の後に反省会が持たれ、フォライ・カタリンはアドバイスを与えたが、それについて自分用に日記に記している。実践見学時には単語のみや短い文章、あるいは疑問符やエクスクラメーションマークで気が付いたことを記している。



教育面からよく構築され、十分な数の歌や唱えを含んだよく考えられたねらいを実現した課業を、フォライ・カタリンは見学した。日記には次のような称賛の言葉も見られる。美しいリズム、繊細な動き、泣く子供に対してのすばらしい教育的解決、遊びのようにして間違いを直した、子どもたちが遊びを楽しんでいるのが分かる、音高をうまく変化させた、能力の高くない子をじょうずに指導、指導者も楽しんで遊んでいる、遊びの中で全員に役が回ってくる、子どもたちが清潔に輝く声で歌う。

## フォライ・カタリンを回顧して

### 伊藤直美「フォライ・カタリン先生との出会い」

コダーイ・ゾルターンの考えた音楽教育法に私が初めて出会ったのは1968年、フォライ・カタリンが羽仁協子の招聘により来日し、その講演会においてであった。まだ高校生だった私は、外国の人が日本の幼児に日本のわらべうたを指導し、日本語で歌うのを見て、大きな印象を受けた。しかし、それが何を意味するか、その時は理解できなかった。

一緒に講演を聞いた小学校の音楽教師だった父が、そこで売られていたハンガリーの音楽教育に関する本をすべて購入した。それは前年に羽仁協子によって訳・編集されたシャーンドル・フリジェシ編「ハンガリーの音楽教育」とフォライ・カタリン他著「ハンガリー子どもの遊びと音楽」、羽仁自身による著作「子どもと音楽」(1968)であった。この3冊が、後に私がコダーイシステムと関わるきっかけとなった。

### 知念直美 「フォライさんとの出会い、そして学びと感謝」

1968年、それは私にとって偶然が重なった、幸運の年でした。その年の4月から、私は母校の小学校(自由学園、初等部)で音楽を教え始めていました。授業をしながら、これでよいのか、と迷うことの多い、そのような時に、私のソルフェージュとピアノの師が、羽仁協子さんに引き合わせてくださいました。

その年、羽仁さんの招聘でフォライさんが来日。そして、講演会、井の頭保育園での公開実践、明星学園小学校での公開授業、ハン音研での勉強会に参加することができました。どれも、これも、私にとっては初めてのことで新鮮でした。

井の頭保育園は、その当時年齢別クラスでの保育で、わらべうたの課業は、2クラスで行われたように記憶しています。1クラスは、私の先輩の音楽教師、木下さんが、もう1クラスは保育士が（その当時は、保育士ではなく、保母と言っていました。）なさったと思います。残念ながら、はっきりとした記憶は残っていないのですが、課業の流れはひとつのお話しのようには組まれていました。

何らかのモチベーションで子供たちが興味を持つように働きかける『導入部』

子どもたちが主体になって遊びうたうわらべうたあそび『主要部』

その日の音楽的ねらいを、遊戯的な方法で練習する 『教授部』

保育士が鑑賞曲を歌って、子供たちに聞かせる 『終結部』

はじまり、があって、クライマックス、があり、落ちついたおわり、がある、物語りの流れのように、進んで行きました。

私はこの課業の流れが大好きで今でもこの流れで実践することが多いです。もちろんその日の子どもたちの様子によって変更することも多々あります。

明星学園での公開授業は、藤田恵一さんがなさいました。コダーイメソッド=ハンドサインではない、と言われてはいますが、ハンドサインを使っただけの授業が印象的でした。

フォライさんが指導なさいました、ハン音研での研修会にも参加することができました。コダーイの作品との、初めての出会いでした。フォライさんの透きとおるような心地よい声と、眼鏡の奥のやさしい眼差しに導かれて、コダーイの教育作品

（『333の読譜練習』、77と15の2声練習、『ビチニア・フンガリカ』、『トリチニア』）を歌いました。もちろん、日本のわらべうたも参加者全員で、一緒に歌い遊びました。新米の私は、緊張しながらの参加でしたが、とても楽しかったことを覚えています。

「来年、待っています！」という言葉と共に離日なさいましたフォライさんとの再会は、1969年9月でした。ハンガリーへは、横浜からナホトカ（当時ソビエト連邦）まで船で、ナホトカからハバロフスクまで車で、ハバロフスクからモスクワまで飛行機で、モスクワで2泊し、モスクワからブダペストまで車で、という行程でした。今では考えられないような道程ですが、当時の多くの留学生は、この行程を使っていました。学生だけでなく、フォライさんも同じような旅をして、ブダペストと日本の往復を繰り返しています（ブダペスト～モスクワ間は、飛行機だったと思いますが）。

ハンガリーでは、フォライさんが先生であり、後見人であり、お母さんでもありました。初めの数日間は、ハンヴァシュ・アニコー先生のお宅で、お世話になり、その後は、アメリカから勉強に来ていたベッツイ・モールが住んでいた下宿に移って、ブダペストでの生活が始まりました。ベッツイは既に帰国した後で、彼女と実際に会うことができたのは、ずっと後になってからのことでした。けれど、ベッツイの話は、毎日のようにフォライさんから聞いていましたので、まるで姉妹のような感覚です。

下宿も、勉強のプログラムも、全てフォライさんが用意してくださっていました。チョコバンツ通りの音楽保育園、週 2 回、ラジオ放送局保育園、週 1 回、どちらの保育園でもフォライさんの「音楽授業」の見学、及び研修がありました。

## 注

### フォライ・カタリン、セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア、羽仁協子の紹介

(1) カラーチョニ・シャールドルについて

コントラ・ジェルジ著『よく知られた教授カラーチョニ・シャールドル』2009年  
タムシュ夫人モルナール・ヴィクトーリア『カラーチョニ・シャールドルのライフワークにおける芸術教育の質問』pdf 無料ダウンロード可 (docplayer.hu) 2021年9月28日

(2) バルコーツィ・イロナ、プレー・チャバ共著『コダーイ音楽教育法の心理学的影響の研究』ケチケメート コダーイ研究所 1977年

(3) 当初の計画では、心理学からのみではなく、言語、数学、絵画からの研究も含まれていた。絵画面からの研究はセーカーチ夫人ヴィダ・マーリアが担当し完了し、本も著した。(バルコーツィ・イロナ『バルコーツィ・イロナとプレー・チャバ共著「コダーイ音楽教育法の心理学的影響の研究」に基づく古い研究の回顧』neveles\_belivek (tankonyvtar.hu)ダウンロード済み 2021年9月28日)

### ハンガリーにおける幼児音楽教育の始まり、フォライ・カタリンの経歴～その始まりと展開～

(1) 『乳児園の規則』XV. t.c. 1891年

(2) コダーイ Z. 『回顧録 1巻』Zeneműkiadó 出版社 1964年 pp. 92-116

(3) コダーイ Z. 『回顧録 1巻』Zeneműkiadó 出版社 1964年 p. 156

(4) 『乳児園の規則』1953年 III.

(5) ボーニシュ F. 編著『私たちはコダーイをこのように見た』Püski 出版 Kft 1979年 pp. 205-213

### 保育園における造形美術教育の状況、ヴィダ・マーリアの経歴の始まり

(1) セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア『自画像ー背景』ボドル、プレー、ラーニ編集 「ハンガリーの心理学者たちの自伝」より Pólya 出版 1998年 p.269

(2) 「子どもの創作過程でのグラフィックの固着」博士論文 1948年 トビリシ 指導教官 Dito Uznadze (心理学研究所教授)

### 日本における 1960年代中頃までの音楽教育と造形美術教育 音楽教育の状況

- (1) 園部三郎『東ヨーロッパ紀行』 pp. 132-135 平凡社 1956年
- (2) 小泉文夫『日本伝統音楽の研究』音楽之友社 1960年
- (3) 小泉文夫編『わらべうたの研究（楽譜編・研究編）』わらべうたの研究刊行会 1969年

### ハンガリー人の目から見た、日本における造形美術教育の状況

- (1) セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア『日本の児童芸術』Corvina 出版 1971年 p.28

### 訪日前のフォライ・カタリン～羽仁との手紙を基に～

- (1) 羽仁協子はコダーイのアドバイスにより、1958年から1年間ヴァルジャシュ・ラヨシュ（民俗音楽学者 1914~2007）の民俗音楽研究グループで学ぶ。
- (2) 羽仁協子の手紙（LFZE コダーイ研究所アルヒーフ蔵）
- (3) 羽仁協子の手紙（LFZE コダーイ研究所アルヒーフ蔵）

### フォライ・カタリン 1968年の訪日 ～フォライの日記を基に～

- (1) コダーイ Z. 『回顧録 3巻』「ハンガリーの音楽教育」序文 Zeneműkiadó 出版 1989年 p.5
- (2) フォライ・カタリンの日記 1968年（手稿）
- (3) フォライ・カタリンの日記 1968年（手稿）日記の中に登場する少女「ヴィダ・マリカの娘」はこの研究グループの1人セーカーチ・アンナのことである。



研究グループのメンバー：ヴィカール・カタリン、セーカーチ・アンナ、伊藤直美、ゴルダーン夫人オラー・マールタ、チャーニ夫人コーシュ・イルディコー、ヘゲドゥーシュ夫人トート・ジュジャンナ、ナジ・アニタ、チョマ・オルショヤ、知念直美（左から右へ、上から下へ）